令和5年度島根県立大学短期大学部

学校推薦型・総合型選抜 社会人 帰国生 私費外国人留学生特別選抜

文化情報学科 小論文問題

【問題】 次の文章をふまえて、物事を判断する際に気をつけるべき点をまとめよ。そのうえで、柔軟な思考をするためにどのような判断の仕方が必要か、あなたの考えを具体例とともに800字以内で論述せよ。(400点)

「自分で決める」という覚悟を持つ、自分の判断に責任を持つというのはとても重要なことですが、自分自身で考え、自分自身で決める、行動するというところに過度のこだわりを持つのはよくないと思います。独学が必ずしもよくないのと同じです。経験値の高い人、その道の専門家、そのフィールドに詳しい人に話を聞くのはむしろ当たり前のことで、もっとも大事なことのひとつだと私は考えています。

ただし、これはあくまで「詳しい人」「経験のある人」に聞くべきで、友だちに相談するばかりでは不十分だということも覚えておかなければいけません。体調が悪いときに友だちに相談しても、心配してはくれるでしょうが、病名や治し方はお医者さんに聞かないとわからない。人生の問題でもこれは同じで、いろいろな経験がある人から見ると、その判断が進めると時間がかかりすぎるとか、バランスが悪いということがすぐ見えるケースがあるのです。

(略)

「人に聞く」ということについて、デカルトも同じようなことを言っています。自分の頭でとことんまで考えぬくということはある意味誰よりも深く追求したデカルトですが、そのデカルトが、自分がよくわからないことについては良識のある大方の人が「これがいい」と言っている意見に従うのがいいというのです。とても現実的です。わからないことは、良識のある人がみとめる中庸の意見に従うのがいい、極端はよくないと言う。なぜなら、極端なことをやってしまうと、そこから揺りもどすのがまた大変だけれども、中庸のものならば修正がききやすいのですね。自分がわからないことについてはとくに、判断の修正がききやすいようにしておく。

こうした「修正力」の現れとして、スポーツの「ハーフタイム」を考えてみるといいと思います。サッカーが典型的ですが、スポーツには前半と後半の間にハーフタイムがあるものがたくさんあります。いい監督がいるチームは、後半になると、守備のシステムを変えたり、立ち上がりでいきなり得点したりして、急に試合展開がそのチームに有利になることが多いのですが、これはハーフタイムで戦術を修正したからなのですね。優れた監督は、前半の相手の動きや自チームの動きをよく見て、ハーフタイムに言うべきことをチェックしておき、ハーフタイム中にああしろこうしろと一人ひとりに細かに指示を与える。そのために、チーム全体の後半の動きが見違えるようになるのです。チームの「ハーフタイム力」ですね。

このハーフタイム力というのは、私たちの普段の生活にも応用することができるものです。何か事にかかっているとき、どこか途中の時点で「ひとまずここがハーフタイム」と決めて、これまでにやってきたことを振りかえってみます。そこで現実認識をあらたにして、このままでいいのか、新たな道を探

る必要があるのか、考えてみるのです。

判断は一度きりではない。いったん決めたことがいい結果を生まないようなら、現実をよく見ながら、それを修正していけばいい。そう考えることで、ずいぶん気持ちが楽になると思います。ただ、それぞれの判断をしっかりと行なっているからこそ後の修正も可能になるので、「後で直せるから適当でよい」ということではもちろんありません。

とくに、それぞれの判断の際に冷静でいられたかどうか、感情に左右されなかったかどうか、「ハーフタイム」のときにはそれも自分で検証してみるとよいでしょう。私たち人間には感情というものがあり、それがあからこそ考える意欲もわくのですが、これに流されてしまうと判断を誤ることも多いのです。たとえば憎しみのような負の感情があると判断を誤ることがある。「憎しみの連鎖」というのはまさにそれですね。こうやられたからやり返すというのをくりかえしていくと、現実が悪くなるいっぽうなのに、当人は現実を冷静に見る目を失っているのです。それに気づかないということも起こりえます。

だからといって感情をすべて排除するということではなくて、たとえば試合に勝ちたい、勝てたら嬉しいだろうというような感情は、モチベーションとしてうまく活用する。そして実際に考える作業に入ったら、一回感情をわきにちょっと置いておいて、熱い感情を持ちながらも思考を冷静に保っていくということが私たちにはできるはずですよ。

こういう「ちょっと置いて」というふうには、自分の感情を外から見ることができれば、いままで自分が持っていた感情が「もしかしたら筋違いのものであったかもしれないな」と気づくこともできます。こういうことには他の人との対話を通じて気づけることが多いのですが、一人で考えていても気づけるようになれば、相当（考え方）が技として身につけていることになると思います。

出典：齋藤孝『考え方の教室』岩波書店、2015年（一部改変）